研究ノート

「There-be 構文」再考

福原慶尚*1

キーワード：深層構造、変形規則、表層構造、存在文

はじめに

(指示的に)「そこに, そこで」の意で使われる副詞 *there* が、中学校の英語教科書にデビューするのは次の文中。

We can see ice hockey game there.

(*NEW HORIZON English Course* 1,82)

このため、次のような「There - be 構文」（存在文）の *There* も、「そこに」と訳すケースが稀に見られる。

There's a Christmas tree by the window. (ibid.2,58)

学生に‘稀に見られる’このケースを彼女／彼らのために解説することが本稿の執筆意図である。

１．Ross の公式

では、上例の「存在文」(Existential Sentences)のルーツとルールを調べることから始めよう。

「There - be 構文」は、変形文法 (Transformational Generative Grammar,以下 TG)では、次のように(1)から(2)へ変形したと考えられている。

(1) A Christmas tree is by the window.

(2) There is a Christmas tree by the window.

この変形ルールは、キンボール(John P.Kimball)の論文(*The Grammar of Existence,*1973)に詳述されている。

(2)のような「存在文」が(1)から派生するためには、(1)の主動詞は be で、主語は非制限的(indefinte,-DEF)でなければならない。

したがって、A unicorn ate in the garden.のような文から*There ate a unicorn in the garden.は派生しない。

また、The unicorn is in the garden.から

*There is the unicorn in the garden.は派生しない。

（「*」は非文を表す）

この派生に関して Ross (Lectures,MIT,1967) は次のように述べている

【仮説】

ネイティブスピーカーはまず、

a Christmas tree is by the window を思い浮かべる。

これに「There Insertion」を行って、

There is a Christmas tree by the window.とする。

【公式】

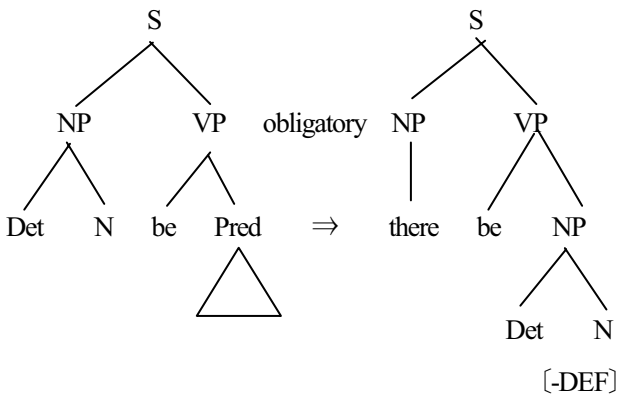
この仮説の公式化。

(3) NP be X⇒there be NP X (where NP is -DEF)

この式の「X」は場所を表現。

（上記のただし書きは、*be* の主語句は限定的なものではないことを表す）

この公式は、次のような枝分かれ図（tree structure）で表すことができる。



ここで「派生」について言及しよう。

従来、ことばは Saussure (1879)らが唱えてきたように、一面的（深層構造：論理構造を明確にした文）と考えられてきた。

ところが、これに異論を唱えた N.Chomsky (1957)は

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

ことばの二面性(表層構造：実際に発話された文と深層構造の二つ）を主張、この二つの間にはいくつかの変形過程のあることを証明した。

たとえば、John is eager to help.の変形過程を見てみよう。

深層構造…… John is eager for John to help someone

↓

この間にいくつかの変形（派生）が行われる　John is eager ϕ ϕ to help someone

↓

John is eager ϕ ϕ to help ϕ

↓

表層構造…… John is eager to help.

（「ϕ」は削除されることを表す）

「ことばの二面性」をさらによく理解するために、今度は文の構造と意味の二つの点から説明してみよう。

例１

(4) John	is	eager	to	help.
(5) John	is	difficult	to	help.
(NP)	(be)	(adj)	(prep)	(V)

この二つの文構造は見た目には全く同じだが、意味が異なる。深層構造が違うからである。つまり、

(4) の help の主語は John ⟶ John helps someone.

(5) の help の主語は、

John 以外の人 ⟶ Someone helps John.

のように書き換えられ、その深層構造は次のとおり。

(4') John prest be eager for John to help someone.

(5') For someone to help John prest be difficult.

(prest : present、動詞の時制が現在形であることを示す)

今度は例１の逆で、意味は同じだが表層部の構造が異なる例。

例２

(6) To swallow safety pins is stupid.

(7) It is stupid to swallow safety pins.

Ross はこのルールの論拠として、次の三点を挙げた。

1. まず、この規則で、存在を表す *There* は非深層構造から派生する。
2. 次に、この *There* を用いた存在文とそれを使わない存在文との間には明白な一般化が可能である。
3. さらに、この規則では、*be* 動詞を使った文は同規則に支配される。

たとえば、A man was seen running from the scene.のように変形的に派生した'be'を持つ受身形は、

There was a man seen running from the scene.

のような存在形を持っている。

２.「There-be 構文」の成立条件

Ross のルール(3)から、以下の文で不自然なのはどれだろう？

① There is a book.

② There are books.

③ There is a book on the desk.

④ There is the book on the desk.

⑤ There is a book there.

①②④が不自然。（①②には、「where NP」が示されていない。また、④の NP は、+DEF になっている。）

このように、「There-be 構文」は場所表現（「where NP」）を必要とし、「何々は～に存在する」という意味を持つ。この時「何々は」の部分（NP）は、限定的なものであってはならないことは既述のとおり。

「There-be 構文」は、There＋be＋NP＋where NP (-DEF)

という形をとるのである。

「限定的」（definite）なものには、1. 一つしかないもの 2. 一度話題にのぼったもの 3. その場に一つしかないもの、の三つがある。「限定的なもの」は、談話の中では話し手が指すものと聞き手が意図するものとが一致する。

３．Kimball の反論

第 1 章で Ross のルールについて述べたが、このルールにはいくつかの点で不合理があると Kimball は主張。その要点は以下のとおり。

まず、規則(3)には *there* の挿入理由が説明されていない。この *there* は指示的な *there* と同じものかどうかについての言及もない。また、同規則は主動詞が *be* 動詞以外（たとえば、‘There entered a white rabbit.’における *enter* や、‘There began a great commotion.’における *begin* など）の動詞を考慮に入れていない。さらに、‘There is space in the manger.’のような文で、*space*(NP)と *in the manger*(where NP)とを切り離せるかどうかの言及がない。

Kimball の主張を理解するために、次のような対になった文を比較してみよう。

(8) a. There is { space / corn } in the manger.

b. { *Space / Corn } is in the manger.

(9) a. There is { fire / a sty } in his eye.

b. { *Fire / A sty } is in his eye.

(10) a. There is { a pain / a splinter } in my arm.

b. { *A pain / A splinter } is in my arm.

以上の例から、規則(3)が適用されるためには、NP は「where NP」と分離できなければならないが、Ross はこれに触れていない。Kimball は、(8-10)に見られる「There-be 構文」が容認されるためには、その深層構造で NP と X とが分離できなければならないと主張する。

ここで、「分離」できるか否かについて、Kimball の考え方を要約すると、(8)の文で、*corn* と *manger* の関係は *space* と *manger* の関係とは異なる。なぜなら、*corn* と *manger* は本来別々に存在するので、この二つは切り離せる。ところが *space* を *manager* から取り除くことは物理的に不可能。ゆえに(8-10)の b.が非文となるのは、NP と X とが分離できないからである。

分離できない例をさらに挙げてみよう。(11)の例で、分離できる NP は定代名詞(definite pronouns=it)で代用できるが、分離できないものを指す NP は代名詞化できないことがわかる。

(11) a. There was a cow in the meadow, but now it's in the barn.
（分離できる：a cow = NP, in the meadow = X）

b. *There was space in the manger, but now it's in the kitchen.
（分離できない：space = NP, in the manger = X）

このように、分離できない NP を代名詞化できないのは、NP は、それを位置づける場所から切り離して

存在することはできないからである。

「There-be 構文」では、「場所」を表すことばを必要とすることはでに述べた。ここで、場所表現のある疑問文の答え方に注目してみよう。

NP と「where NP」の共起関係はどうか。たとえば、Where's the chalk? —— The dog has it.は正文。

ところが、Where's the farm? —— *John has it.は非文。前者は、The dog has it (in its mouth).と考えられるが、後者には場所表現がないからである。

「場所」というものはあるところに存在し、そこに何かを位置づけている。このことをさらに理解するために、Kimball は上で述べたような NP を分離できないケースをあげている。*There* を使った「存在文」だけが容認される(12)と、定代名詞で代名詞化できない(13)である。

(12) a. There was a thunderstorm yesterday.
b. * A thunderstorm was yesterday.

(13) *There was a thunderstorm in Toledo yesterday, and it was (found lurking) in Dallas.

(12.a) の「There-be 構文」では、NP と「where NP」の関係は、「出来事」(events)と「発生時間」(time of occurrence)の関係になっている。

つまり、「出来事」と「発生時間」は切り離せない。ある物はそれが位置づけられる場所と別々に存在することはあり得ないからである。

Kimball は、さらに「There Insertion」を容認しない場合についても述べている。

分離可能

(14) a. There is a splinter in my arm.
NP X
b. A splinter is in my arm.
NP X

分離不可能

(15) a. There is a pain in my arm.
NP X
b. *A pain is in my arm.
NP X

「出来事」は「時間」に支配されるから、この二つは分離できない。ゆえに(12.b)は非文であるという Kimball の主張は容易に理解できよう。

(12) a. There was a thunderstorm yesterday.
出来事・現象 時間
b. *A thunderstorm was yesterday.

さて、「出来事」がその「発生時間」と切り離せないもう一つの理由は、同じ「出来事」は同時に起こり得ないことからも説明できる。もし、同じ時に二回起こるなら、異なった二つの時間内で発生することを意味するので、それを切り離すことはできない。二人の人間が共通の一つの痛みを同時に体験することはあり得ない。このことから、(12.a) は (12.b) に「There Insertion」をかけて生成されたのではなく、「There-be 構文」は元々存在していたと考えられる。

（もし、「出来事」を「時間」から切り離して存在させることができるなら、*A desk was yesterday.は容認されるはず。）

4．「存在」するようになる

Ross の公式に対する Kimball の反論の一つは、すでに指摘したように、「There-be 構文」において、*be* 動詞以外の動詞についての言及がないことである。

この章では、その点についての Kimball の見解を紹介しよう。

存在の *there* と共起する動詞に、移動動詞（movement verbs）がある。たとえば、‘There entered a squirrel .’や‘There exited a squirrel .’ のように、移動動詞には興

味深い使用制限がある。

また、*There* を用いた存在文は、ある環境のもとで、*run* や *walk* のような移動動詞と共起する。

(16) There ran a man { into the room. / from the building. / *around the track. }

この例は、「There Insertion」は前置詞句の意味内容により、適用される場合とそうでない場合があることを示す。ある動詞が存在を表す *there* と共起するということは、「あるもの」(NP)が「存在」するようになることを含意。「存在する」ということは、「あるもの」が動いて「出現」する、つまり、話し手の知覚（視野）に入ってくることを意味する。したがって、「あるもの」が「出現」するとき、その場所に話し手のいることが前提となる。たとえば、Sherry was sitting in the house when there entered a white dove.という文では、Sherry の視点から言って、‘ハト’が「存在」してくることになる。

何も（視野に）なかった「もの」が「存在」するようになるという意味的条件から *rise* を伴う「存在文」が容認される例が次の(17.a)。

(17) a. There rose a green monster from the lagoon.
b. *There sank a green monster into the lagoon.

ところが、視野にあった「もの」(*monster*)がその 「場所」から沈んで見えなくなった（つまり、「存在」しなくなった）(17.b)は「存在文」として容認されない。（もっとも、誰かが水中にいて、その *monster* が沈んでくるのを見た、と考えるならこの文は容認される。） 類例をあげよう。

(18) a. There began a riot.
b. *There ended a riot.

Begin という動詞は、ある出来事が初めて話し手の時・空間に存在するという意味だから、(18.a)は正文。

ところが、すでに眼前で展開されている暴動が終わったということは「初めて存在する」ことに反する。よって、(18.b)は容認されない。

Be 動詞以外の動詞が、*There* を使った存在文と共起する他の例で、たとえば次の文は非文。

(16) *There ran a man around the track.

この文では、男がトラックをぐるぐる走っているだけで、何も存在してこない。

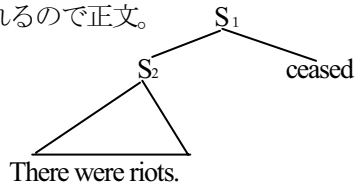
(19) *There didn't begin a riot.

(19)は暴動の開始を否定するもので、暴動は「存在」しなかったから非文。

さらに、

(20) There ceased being riots.

「暴動の状態が終わった」というような文では、存在の *there* は下位の文に現れ、それが後で引き上げられるので正文。



おわりに

本稿は「There-be 構文」とは何か、―― 特にその生成過程と、*be* 以外の動詞の共起関係 ―― を再考することにあった。引用した論文は Kimball の *The Grammar of Existence*’ 1973)。その論点は Ross の「There Insertion」とそれに対する Kimball の反論・反証が中心となっている。その中心的な部分をピックアップして訳出・言及することにウェイトを置いた。

それらを通して、「There-be 構文」の矛盾点のいくつかを学生は理解したはず。しかしそのことはこの公式の脆弱さによってことばの統語上の一般化の難しさを再認識することになった。

中１でデビューする「There-be 構文」は、一筋縄ではいかない。

参考文献

Kimball,J.P.；*The Grammar of Existence*，CLS 9，1989

今井邦彦；変形文法のはなし，大修館，1984

林　栄一；There-be 構文の本質(1)，大阪外大英米研究，9：1980

毛利可信；橋渡し英文法，大修館，1986